

裏磐梯の植林事業

1888年の磐梯山の噴火と山体崩壊は、明治時代（1868～1912年）の日本に起きた最悪の自然災害でした。磐梯山の峰の1つが山体崩壊し、これに起因する岩なだれが11の集落を埋没させ、477人の犠牲者を出しました。周辺の土地は荒れ果てた不毛の地になりました。

植林事業は20世紀初頭に始まりました。政府はこの地の植林に尽力した人に低価格で土地を買い取る権利を与えました。福島県出身の遠藤現夢（1864～1934年）は、植林事業の最前線に立ちました。彼は全線開通したばかりの鉄道線路を利用して、会津若松市から苗木を運んできました。遠藤と彼の協力者で林業家の中村弥六（1855～1929年）は、13.4平方キロの荒地に数十万本の植林を成し遂げました。彼らが植林した最初のアカマツの多くは今も五色沼自然探勝路で見ることができます。こうした努力が現在の豊かな生態系を育んだのです。